

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2024. 8. 19

文責/JUN

“見えない” “ことばにならない” ものこそ

7月30～31日、三重県津市の総合文化センターを会場として、本会主催の「第25回授業づくり・学校づくりセミナー」を開催した。会場、オンライン合わせて約450名の方々にご参加いただいた。猛暑の中かけつけてくださった皆さんに心からのお礼を申し上げたい。

セミナーのテーマは「協同的・探究的学びとアートの教育」だった。プログラムはそれぞれの回のテーマと合致したもので構成しているのだが、毎回のことだけれど、何の打ち合わせもしていないのに、不思議なほど、学びを具現化するために欠くことのできない「とても大切なこと」が、2日間の各セッションを通じて浮かび上がる。今回のセミナーで浮かび上がったのは、“見えないもの” “ことばにならないもの” の中にある「気づきの大切さ」だった。

1 子どもの学びを「みる」

セミナー1日目の北田佳子先生（埼玉大学教授）のセッションは「教師の『見方』『聴き方』が変わるとは」だった。それは、まず、授業における子どもの写真等を提示して、そこから「何が見えるか」を参加者に問うという形で始まった。

映し出されたのは写真だから子どもが何を語り合っているのかは分からない。ということは、参加者は、そんな子どもの姿を凝視することによって「子どもの学びをみる」とはどういうことなのかを体験することとなったのだ。

ここには、「学ぶのは子ども」だという学び観がある。教師が教える授業観ならこういうことにはならない。そこにあるのは、「子どものなかに何が生まれているか」ではなく「教師がどう教えるか」という指導方法だからである。

子どもは、教師が提示した課題をどう感じ、何をどう考えていこうとしているのか、そこで何が分からなくて、何に気づいているのか、その「分からなさ」や「気づき」はこの課題の探究を進めていくうえでどういう意味をもつのか、さらに、一人ひとりの「分からなさ」や「気づき」が子ども同士の間で、どのように受け止め合わせ、その比較とつなぎから何が生まれそうなのか、そういう子どもの学びの事実は、子どもが「学びの主人公」だと考えたとき、欠くことのできない大切なものとなる。

私たち教師に求められるのは、そういう子どもの事実をとらえて、その学びが深まるように促進することである。先生に教えられるのではなく、子どもが自分たちで取り組み発見していく学びにしていくために、私たち教師が行わなければならないのはそういうことなのだ。その大切な第一歩が、子どもの学びの事実を「みる」ということだ。北田先生のセッションにはそういう意味があった。

このセッションを通じて私が感じたのは、子どもの事実は、「みえているようでみえていない」ということである。それは、言葉で語られたものとか、子どもがそれを表すような行動をとるとかいった、表面上とらえやすいものではなく、むしろ、言葉では語られない、語るができるほど明確にはなっていないもの、まだ子どもの動きにはつながっていないもののなかに「深い学びの兆し」が存在しているからである。すつと言葉で語るができるのは、以前から分かっていたこと、あるいは比較的簡単な課題だったからそうなるのであって、考えに考えてふつと気づいた、あるいは浮かび上がってきたものは、まだ明確になっていない分言葉にはなりにくいのではないか、理路整然と語るなどできないのではないか。そう考えると、私たちが耳を澄まして聴かなければいけない、聴こうとしなければいけないのは、言葉にならない子どもの「分からなさ」や「気づき」なのではないか、そう思えてくる。

北田先生のセッションで提起されたのはそういうことだったのだと思う。そして、このことが、この後、ずっと2日間を通して引き継がれていったのだ。

2 言葉にすることよりも、言葉にならないものを大切にすること

国語教育において「話す」ということはどう重視されているのだろうか。

どちらかと言うと、はっきり、わかりやすく、相手に伝わるように」ということが大切にされているのではないだろうか。学習指導要領にも、「目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫すること。」などと書かれている通りである。

相手の論に左右されず自分の考えを筋道立てて主張する「話し方」として「ディベート」を重視しなければなどという考え方もある。

しかし、何かを思考・探究しているときは、そうではないのではないだろうか。成人社会においても、自らの身边に起こっていること、その状況、そして今後どうしていけばよいのかといったことが、どんな場合でも、いつでも明瞭になっているということはないのではないか。むしろ、迷い、葛藤し、考え込み、思考の泥に沈んでいることがかなりあるように思う。

もちろん、明瞭な「説明力」「話す力」を否定するものではない。それはそれで必要だろう。しかし、探究する学びに没入したとき、他者の考えを聴く側に立ったとき、明瞭ではない言葉を大切にすること、聞き方を大切にしなければならぬのではないか。そうでないと、探究することも、他者とながら合うこともできない。子どもの言葉を受け取る教師の聴き方ならなおさらそうでなければならない。そういう聴き方をしなければ、すべての子どもの学びをはぐくむことはできない。

そういう意味で、私たち教師は、何もかも明瞭な言葉で語ることを求めるのではなく、学びにおいては、言葉にならないものを、そこにこれまでにはない大切な気づきがある可能性があると考えて、繊細な心持ちで、あるときは時間をかけて、あるときは言葉にならないままであっても、その子どもの気づきに思いを馳せなければならない。

最近、わけあって、何年ぶりかで授業をさせてもらった。子どもの名前も知らない学級における1時間だけの詩を読む授業である。授業に当たり、私は、すべての子どもから、その子の感じたことを出してもらおうと考えていた。いつもの担任教師ではない「おじいさん先生」の授業、それは子どもたちにとって非日常のスペシャルタイムになる、その時間がどの子にとってもよいものになってほしい、それには、どの子どもの考えも私が受けとめること、そう考えたからである。

もちろん、詩の鑑賞に正解はない、一人ひとりの感じたことがその子どもの鑑賞だ。ただ、その学校は聴き合い学び合う学びに取り組んでいる学校だ。だから、子どもたちは、違いを超えて、互いの読みを聴き合うだろう。その聴き合いのなかから、自分にはないものを受けとめ、それぞれにおいてそれぞれの読みを豊かにしていこう。それは一人ひとりの子どもが行うこと、だから、私は、どの子どもの読みに対しても耳を傾け寄り添おう、そのように考えていた。

その時間になって初めて読んだ詩である。私は、授業の前半、何度も何度も音読をして、それぞれにおいて詩の世界に浸れるように努めた。その甲斐あって、子どもたちは、次々と語ってくれた。何人もの子どもは、考え考え、言葉を探しながらの語りになった。けれども、私は、それを好ましい思いで聴いた。そして、そうした子どもたちそれぞれの読みをつなぐと、それがその詩丸ごとの読みになっていることが感じられ、子どもたちはすごいとうれしくなった。

そうしたところ、一人の子どもが「あのう……」と小声で話し出した。私にはよく聴こえない、でも、何か分からないことがあって、それを尋ねてきたのには違いなかった。私は、その子どものところに近づいた。すると、横や前の子どもの支えもあって、その子はみんなにも分かるような声で、尋ねたいことを言葉にしたのだった。それは、その詩の1連から4連まで、つまりその詩丸ごとにかかわることだった。この子は、みんなの言っていることを聴きながら、詩全体に目を向けていたのだ。そうしたら「どうしてだろう？」と思うようになった。聴いていたから湧きあがった疑問、これこそこの時間でもっとも大切にしなければならないものだ、そう直観した私は、学級の子どもたちみんなに、この子の「知りたいこと」に応じるように促したのだった。

詩の授業の最後は音読、その音読をその子に……私は、授業時間が終わりに近づくなか、そう決めた。この子が生み出した出来事こそ、この1時間のシンボルだと思ったからである。

その子の音読を最後に、私は、授業を閉じた。すると、その子が、外に遊びに行くための帽子を手に、跳ぶようにして私の方にやってきた。その子は私に何も言わなかった。そばに来ただけだった。でも、私にはその子の気持ちが分かった。なんとも言えないうれしさに包まれ、私は、その子の肩に手を添えた。すると、その子は、教室の出口が近づくと、スキップするように私のもとから運動場に飛び出していったのだった。

言葉にできないものを受けとめてもらった子どものうれしさ、それは、その子どもにとってどれだけのものなのか、私は、しみじみとそれを感じていた。そしてそれは、その子が、『〇〇(詩の題名)』がよかったで、なみだがでそうになりました。」と授業後に書いているのを読んだとき、私の感慨はさらに深いものになったのだった。

私たち教師は、他者とともに生きるための話し方を育てなければならない。けれど、その一方で、言葉にならないもの、言葉にできずにいる子どものことをこよなく大切にしなければならないのだ。

3 空白がみえる教師に

セミナー2日目に、津女声合唱団の皆さんに出演していただき、3曲もの合唱を披露していただいた。生演奏は、25年に及ぶセミナーで初めてのことだった。それは、詩を読むという学びを単なる国語の授業としてだけで終えるのではなく、それを美術や音楽とつなげたらどう共振するのか、それを見極めたいという趣旨から、国語の授業で取り上げた詩の合唱をしていただいたのだった。

この前代未聞の企画・挑戦については、いずれ、詳しく報告をしたいと思っている。それほど、心揺さぶられることが子どもの中に生まれたからである。その報告は、どのような形で行えばよいのか、中身が濃く、内容量も多いだけに、じっくり検討したうえでと思っている。

ただ、「“みえない” “ことばにならない” ものこそ」という本たよりのテーマに関するところが、セミナーのこの企画において学ぶことができたので、そのことについてここで述べておきたい。

それは、合唱を披露していただいた後で行った、津女声合唱団指揮者の馬場浩子先生（名古屋芸術大学教授）と画家のひぐちけえさんと私による鼎談においてだった。

ひぐちさんと馬場先生という美術と音楽のアーティストのお二人が直接的な対話になったことだった。馬場先生が次のようなことを話されたのである。

「音符と音符の間には空白の部分があり、その空白の部分に想いを込めること」（馬場先生がおっしゃった通りではなく私の記憶に残っているものなのでこの通りではないかもしれない）が、合唱を豊かにしていくために大切だとおっしゃったのだった。

その言葉を耳にしたとき、私は体が震えるような気持ちになった。北田先生のセッションにおける「言葉として語られないものに存在する子どもの学びをみる」ということとつながったからである。私は思った。どんなことでもそうなのではないか。言葉で語られるもの、文章として書かれているもの、体の動きとして目で見ることのできるもの、それだけ見て聴いていたのでは、本当に豊かなもの、大切なものは見逃してしまうのではないか、実は、本当に大切なこと、本当に価値のあることは、見えないところにあるのではないか、その見えないところに存在するものをみようとすることから、それぞれの心の中に豊かな何かが生まれてくるのではないか、そう思ったのである。

音符に表された音を正確に歌うだけでは人の心を揺さぶる合唱にはならない、そうではなく、音符としてあらわされていないところにどういうイメージを抱き自らの声に乗せていくか、そこに、「美しさ」や「情感」が表れるのではないか、そういうことを馬場先生がおっしゃったと思ったのだった。

「行間を読む」という言葉がある。それは、文章を読むときもっとも大切なことだとして言われてきたことである。文字として書き表されたものを読むだけでは本当に読んだことにはならない、言葉になっていないけれど、そこに醸し出されているものを感じ得たとき、その文章を味わったと言えるのではないか、それが「行間を読む」ということなのだ。

実際の授業でこんなことがあった。

「お手紙」（アーノルド＝ローベル作、三木卓訳）の授業においてである。

お手紙がこないというがまくんの嘆きを聴いたかえるくんが、がまくん宛ての手紙を書いて、その

配達をかたつむりくんに頼む。そして、がまくんのところに行き、自分が手紙を出したことは言わないで、手紙が来るのを待つようにがまくんに働きかける。ところが、そんなかえるくんに対して、がまくんは、「そんなこと(手紙が来ること)、あるものかい。」「ばからしいこと、言うなよ。」などと言いつつ放つ。

このがまくんとかえるくんのやりとりを読んでいたときのことである。

一人の子どもが、突然、とことこと黒板のところに出て行って、そこに書かれていた「ばからしいこと、言うなよ」というがまくんの言葉を指して、「これって、怒っちゃったのかなあ?」と言ったのである。

彼の疑問を受けた子どもたちは、本文に目を向ける。そして、すぐに、「がまくんは怒っている」という考えを次々と述べ出した。子どもたちは「ばからしいこと」という言い方からそう感じたのだ。こうして子どもたちは、怒っているがまくんというイメージを増幅させていく。

そのときだった、別の子どもが次のような問いを投げ入れた。

「かえるくんとがまくんは親友なのに、どうして怒るん?」

この言葉で、「がまくんは怒っている」と言い切って、みんなして「そうそう」と同調していた雰囲気は凍ったように静まった。

授業をしている教師が、静かに、かえるくんとがまくんのやりとりが書かれている文章を音読するように促す。読み終わると、ペアで感じたことを聴き合うように指示する。その後、子どもたちの言うことが一変することになる。

「がまくんは、かえるくんが親友やから、『ばからしいこと言うなよ』とか言うつもりはないと思うんやけど、でも、お手紙が来んから、イライラしとるから、思わず言ってしまった。」

「親友やったら、たぶん怒らんと思うから、ちょっと、お手紙来んから、拗ねて言ったんやと思う。」

子どもたちは、行間を読んだのだ。言葉として表されている状況と状況をつなげたとき、がまくんの口から出ている言葉の奥にあるものが浮かび上がったのだ。それは、子どもたちの日常ともつながる。だから、次のように言う子どもも出てくる。

「ぼくのお母さんも、自分がイライラしたとき八つ当たりするから、がまくんもかえるくんに、自分がイライラやから八つ当たりしたんや。」

子どもたちの表情には、「そうだったんだ!」と、なぞが解けたかのようなうれしさのようなものが表れている。そして、そんなみんなの言葉にじっと耳を傾けていた一人の子どもが次のように語った。

「わかってくれると思って言った。親友やから、気持ち、わかってくれるかなと思ったから。」

この子どもこそ、「かえるくんとがまくんは親友なのに、どうして怒るん?」という問いをみんなに投げかけた子どもだった。この子は、この問いを出したそのときから、「ばからしいこと言うなよ」と怒ったように言うがまくんの言い方に違和感を抱いていたのだ。「どうしてこんなに怒ったように言うのだろう」と。そして今、彼は、「そうだったのか!」と、納得したのだ。

言葉として表されているものだけが物語に描かれたものではない。むしろ、言葉にはなっていない、つまり行間に忍ばされているものに物語の味わいがある。それは、「書かれていないもの」「見えないもの」を「見よう」とする読み方・感じ方をしない限り、姿を現さない味わいなのだ。それは、「音符と音符の間の空白に想いをこめる」という馬場先生の言葉と通じることなのではないか、つまり、「味

わい」を生み出す芸術の世界に、このことは共通していることなのだ。

そこまで気づいたとき、私の心に浮かんだのは、それは、芸術の世界だけのことではないのではないかということだった。

そう感じたとき、浮かんだのは、教室の子どもたちのことだった。

私たちは、日々、何人もの子どもたちを対象として授業を行い、子どもたちの学びを深め、子どもたちの育ちにかかわっている。その子どもたちを見つめる“まなざし”に、「行間を読む」「音符と音符のあいだの空白に想いを込める」ということがなければならぬのではないか、そう思ったのである。セミナー一日目の北田先生が参加者とともに考えようとされたのはそのことだったのだ。

子どもは、それぞれの内に生まれたものすべてを私たち教師に見せてくれているのではない。子どもたちが語る言葉も、子どもたちが浮かべる表情も、書いてくる文章も、それは子どもたちの内に生まれているものの一部なのだ。

特に、子どもが「分からない」こと、「間違っているのではないか」と思うこと、「知られたくない」と思っていることは言わないことが多い。それよりも、何が分からないのかが分からない、自分の気持ちが判然としない、どうしてよいか分からない、といった自分にとって正体不明のことを抱えているときは言葉にできないのだ。

もちろん、ふっと気づいたことを出してくることはある。しかし、そういうときは、そのほとんどが「気づきのかげら」のようなもので、語り出しても言葉にならなかつたり、途中で言えなくなつたり、場合によっては支離滅裂になつたりする。

つまり、子どもたちの言葉は、不確かさに溢れている、そう考えるべきだ。でも、その不確かさにこそ「学びの兆し」「学びのきっかけ」がある。「学ぶ」とは、未知なること、不確かなことに立ち向かい、そこから何かを見つけ出すことだと考えると、理路整然と説明できる「分かっていること」よりも、不確かなもののほうが重要である。私が、「分からないこと、間違いは宝物」(『続・対話的学びを生きる』ぎょうせい刊)と述べているのは、そう考えているからである。

私たち教師にとって不可欠なのは、そういう「見えないもの」を見ようとする“まなざし”なのだ。「音符と音符の間に想いを込める」ことなのだ。「行間を読む」ということなのだ。

それは、「みよう」としない限り「みえてこない」ものである。けれど、「みよう」としているのだけれど「みえない」と言う教師は多い。そして、「どうしたらみえるようになるのだろうか？」という嘆きを吐露する。

私は、何人もの人のそういう嘆きを耳にした。そして、私もまた同じように嘆き、「みえる」ことへの憧れを抱いていたのだとふり返り、それらの教師のその思いの尊さを思った。

「みえる」ということは、見識の深さが不可欠ではあるけれど、たぶんに感覚的なものである。それは、「経験」でしか生み出せないものだ。そしてその「経験」は、「みえない」ことを自覚しない限り意味ある経験にはならない。そういう意味で、私は「嘆く」教師こそ「みえる」感覚を拓いていく教師だと思っている。

「みえないもの」「ことばにならないもの」に心を砕く……今年のセミナーで浮かび上がったこのことは、簡単なことではないだけに、参加した方々の心に響いたにちがいない。